

ISSN 1000-1111 邮发：京报出版集团(每月10元) 邮发：京报出版集团(每月10元) 邮发：京报出版集团(每月10元)

春燈

2017 August

8月号



主宰の句

安立公彦

枇杷熟るる夕日に幸を祝ぐ様に

鯉のぼり未来を胸に天翔よ

青梅の瑞みづしさよ掌に受くる

籐椅子に師の忌近しと思ふ日や

魂合ふも近しや永久の涼しさに

(悼・慶子さん)



久保田万太郎の句

人のうへやがてわがうへ螢とぶ

『冬三日月』昭和二十七年

万太郎の小説「戯曲の大方は時代、町、人の滅びにまつわる不条理が隠微に描かれる。けれども、この俳句は螢が自他を繋げる存在として詠まれた救いのある作品である。「人」と「わが」の対句、「うへ」のリフレインと緩やかな時の移ろいを示す「やがて」は、万太郎の天性のレトリック。かれの言う「よろこびの翳」が揺曳している。ところで、その「人」とは女人であろう。

鈴木直充

久保田万太郎の句

つりしのぶ越して來^くるなりもらひけり

『流寓抄』昭和三十年

前書に「昭和三十年六月十六日、鎌倉より東京にうつる」とある。一見なんでもない句のようだが、師の後半生は震災、震災による転居、やっと落ち着いた湯島で貴ったつりしのぶに涼を得、安堵の様子、句中の「なり」の二文字に喜びと癒しの余情が印象的。同時句の「へしたしさや梅雨の高聲兩隣」に湯島の古きおもかげと親しみあふれる師の人柄がしのばれる。六十六歳の句である。

菅澤陽子

燈下集



○ 柴崎富子

ダイヤモンド婚ひそと自祝す聖五月
一服の白湯飲む窓辺朝涼し
指ぬらす水も日毎に梅雨めける
短夜やポーチの内に睡眠薬
薄暑光丘の墓苑に鳥の影

○ 園部落郷

一直線ゆゑ退屈な春田道
日の光返す流れや水芭蕉
纒か枝見せて満開幣辛夷
筒鳥に目覚めてをりぬ昨日けふ
筒鳥に目覚めて畑へ行く時刻

○ 松橋利雄

菖蒲湯や窓に更けゆく風の音
母郷美し疎林の端の桐の花
子の遠忌豆飯に食すすみけり
如何ともしがたき気うつ葛桜

俳縁の一会の有縁濃紫陽花(偉・竹内慶子様)

○ 山内四郎

てふてふや村の外れの保育園
これ見よとばかりに燕ひるがへる
ゆく春や無表情なる今日の空
人の世の五月の月日はじまりぬ
昼寝より覚めて我が家でありにけり

○ 保育園鯉幟いの一番に

草餅の餡も草色頬張るぞ

この長さ驚くばかり松の芯

文化会館通りや初夏の花数多 (武蔵野)

白つつじその奥の緋のつつじかな

○ 小林のり人

経蔵の高床の蟻地獄かな

ほうたるや海抜百の棚田道

母卒寿琴さらふ夏座敷かな

さりげなく言葉をかへす団扇かな

ガリ版の同人雑誌曝しけり

○ 三上程子

雨の日の郭公寺山修司の忌

己が影蹴つて白靴汚しけり

昼顔や約束の日は疾うに過ぎ

万緑に溺るる記憶掬ひけり

青鷺のやうやく一歩踏み出せり

○ 更衣楡の高みを風渡り

川底を擦つて舟たつ半夏生

沢蟹のざわざわと音朱きかな

ふところを潮風とほるラムネかな

山荘は雲湧きやすし青胡桃

○ 諸戸せつ子

ふと横に母の佇つかに露を煮る

新緑のあふるる東京愛しきや

書に向かふ時が幸せ夏に入る

胸中に思ひ出たむる薄暑かな

更衣暮しは何もかへられず

○ 大嶋洋子

老鷺の声する方に歩みけり

麦秋や話の弾む下校生

炎天の石に忘れて花鋏

週一回のリハビリ夏に入りけり

歌声につられて合はす「夏は来ぬ」

○ 綱 徳 女

渡御の列抜けて草鞋を締め直す (葵祭)

夕立や脳裡の回路小休止

核心を衝けぬままなり瓜ぎざむ

寂寞の夕べを呼べり黒牡丹

ハイ・タッチして薫風の別れかな

○ 中村嵐楓子

夏めくやフランスパンを鷺掴み

万緑や若き日われに風の棲み

挽ぐときのトマトに五指を吸はれけり

薫風や弦楽トリオ髻つ面

蟻の曳く生きものに目のありにけり

○ 鷹崎由未子

傘雨忌の過ぎたる鳩の籠り鳴き

ふるさとは夕日の匂青すだれ

君恋し海月の青く見ゆるとき

湯しめりの髪に手櫛や蛍の夜

卯の花腐しまぶたつめたく目覚めけり

○ 小張昭一

みどりの日帝国主義の種時くな

子に負くる縁台将棋や風薫る

見競ぶる真砂女が詠みし牡丹と匂

月涼し維新を偲ぶ五稜郭

床の宴河鹿ほうたる初鯉

○ 鈴木鳳来

常念岳の今朝よく見ゆる五月晴

あの頃の日の丸弁当麦の秋

南天の蓄ほつほつ狐雨

ががんぼの幽かな羽音朝の来る

一丁を二人で分かつ冷奴」

○ 松本峰春

前後左右しやがんでも見て燕子花

子蠶螂その身構への親譲り

一の谷は源氏二の谷は平家蛍

池の水揺らすは通し鴨の番」

杜鵑鳴いて話のとぎれとぎれ

当月集

安立 公彦選



○ 荒井ハルエ

昼月のうする空や桐の花

さざ波の立ちては消ゆる代田かな

五月田や振返り見る越の山

夕闇に渦くづれゆく蚊遣かな

一村を震はせゐるや牛蛙

○ 中澤弘

青嵐シヨスタコヴィツチの五番聴く

下刈りのをみなの背伸び花擬宝珠

ひなげしやひそと露地去る救急車

豆腐売る喇叭の久し鴨足草

恥ぢらひの所作彷彿と月見草

○ 永井恵子

誘はれず誘はず黄金週間過ぎゆけり

ひと群に女交へて溝浚へ

浮世絵の一重瞼や夕薄暑

地に近く牡丹は色をひそめけり

黒南風や牛蒡の大葉うらがへす

○ 佐藤玲子

曇天もまたよしとせむ初夏の旅

満開の薔薇饒舌のガイドかな

用心の杖を持参の母の日よ

米寿とは何時より都草黄色

米寿とて集ふやわれに桜鯛

○ 持田信子

葉桜や園児の探す宝もの

電車ごつこの園児の歩み麦の秋

街道の明治の屋並夏つばめ

枇杷熟るや干す靴下は五本指

武蔵野の旧家に残る棕櫚の花

春燈の句

安立 公彦選

真夜中の窓煌々と夏の月

東京 山口 地翠

日の差せば木々の緑の香り立つ

草も木も緑したたる峡の村

雨上りの白壁光り夏兆す

高みへと舞ひ昇る鳶竹の秋

東京 佐俣まさを

老鶯や風吹き抜くる丸木橋

石斛や千年杉の華飾り

人知れず祝ふ記念日胡瓜揉

君のゐる午後の図書室青田波

神奈川 宮崎 洋

おほきくてまるくてさみし大でまり

建前や五月の空へ香り立つ

花あふち喪服の影の過ぎにけり

たわい無き夫婦喧嘩や薄荷水

丈つめしままに遺され白餅

兵庫 古川 幸子

独り居の早き夕餉や焼茄子

玉葱を炒める音や梅雨深し

正調の箱根馬子唄螢の夜

米寿なる夫婦茶碗に新茶注ぐ

紫陽花や色を尽くして雨を待つ

紙はしに生れる一句明易し

アカシアの花や白々明けの月

鈴なりの巫女のみすずや桐の花

偕老の妹な遅れそ更衣

落暉へと一途の鰭やつばめ魚

三社祭父は神谷パーめざしゆく

旗たててかき氷日和と申すかな

憲法九条皆老いぬ土用波

ひとりゐて筍飯を頂きぬ

東京 大草由美子

東京 小林 文良

神奈川 丸山 允男



余言

安立公彦

一服の白湯飲む窓辺朝涼し

柴崎 富子

作者は体調をくずして入院されていたと聞く。八月号の
出句の中にこの句を見て安堵した。「一服の白湯」は予後
の服薬だろうが、如何にもきわやかだ。「白湯飲む窓辺」
も清々しい。窓辺に寄る作者の姿が見えて来るようだ。

こういう句に、余分な鑑賞は蛇足というもの。水彩画を
見るような瑞々しさを覚える作品である。

菖蒲湯や窓に更けゆく風の声

松橋 利雄

歳時記を開くと、「菖蒲湯」は生活でなく行事の項目に
載っている。邪気を払い心身を浄めるという風習は長い歴
史を持つ。端午が菖蒲の節句と称されていることからも頷
ける行事である。子供の頃から親しんだ菖蒲湯だ。

現代の菖蒲湯は、大方が陽暦の五月五日に沸かす風呂。
初夏の夕空もようやく更けゆき、独り菖蒲湯に入っている
と、かねてとは異なる思いがしずかに湧いてくる。更けゆ

く窓に鳴る風の音も、いつもとは違った趣だ。「窓に更け
ゆく風の音」が、作者に語りかけて来るような句である。

ガリ版の同人雑誌曝しけり

小林のり人

この句を見て、時間がはるか昔に遡る思いを覚えた。作
者は若い頃、仲間とガリ版刷の同人誌を出していたのだら
う。謄写版刷のあの独特な匂いは、まさに青春だ。ガリ版
専門の印刷所もあったが、大方は自筆で原紙に鉄筆を走ら
せた。現在、春葉、房洋両句会で出している「燈」の第一
号は、私の自筆のガリ版刷である。

この句「曝しけり」に作者の思いが良く表現されている。
大事に取って置きたい同人雑誌である。

夏立つやいよいよ松の男振り

近藤 牧男

六年前出版された、野田坂伸也氏の『野田坂造園樹木事
典』には、赤松、黒松を次のように紹介してある。赤松に
ついては、「樹皮が赤褐色で細くやわらかく、全体の樹姿
が優しいことから女松とも呼ぶ」。黒松は、「樹皮の荒々し
さ、鋭くピンと張った葉の緊張感から醸し出される剛毅な
雰囲気は、古武士のような威圧感がある」。

この句、「いよいよ松の男振り」は、この事典にあるま

さに黒松である。加えて古武士の威圧感、岬に立つ黒松の風情だが、男振りの松は日本庭園に立つ容姿端麗な松としたい。「いよいよ」という副詞が善く働いている。

向きかへて遠嶺をめざす田搔牛

栗原 完爾

「田搔」は、田打の終わった田に水を引き、土の固まりを砕き均す作業である。現在大方の田に、トラクターに牽かれた農業機械が見られるが、山間部では、今も田搔牛が活躍しているのだろう。

この句、今しも代牛が畦の一方に着き、向きを替えて代搔を進めるといふ田搔の一景を詠んだもの。その代牛の彼方には、この地で人びとに親しまれて来た山嶺が見えている。田搔牛はその嶺を目指すかに黙々と足を動かす。代搔という日本古来の農作業が、さわやかに表現されている。

面影の笑顔かさぬる沙羅の花

三代川玲子

五月二十五日は春燈七月号の編集日だった。午後突然竹内慶子さんのご子息から連絡があり、慶子さんの逝去を知った。慶子さんは二年前夫君を亡くされ、自身も以前病んだ乳癌の再発で治療の最中のことである。二十七日の通夜には大勢の弔問客が訪れた。柩にねむる慶子さんは随分痩せて見えたが、いいお顔だった。

この句、その慶子さんの面影を、沙羅の白花に「笑顔かさぬる」という中七が、整った思いの深い句にしている。

病院を出づるやにほふ夜の新樹

藤原 若菜

若菜さんの母堂が入院中ということは聞いていた。この句の前後に、〈車窓より祈りのこころ夏の富士〉、〈葉桜や母をいざなふ父のこゑ〉の句がある。この病院は三重にある。「車窓より祈りのこころ」、「母をいざなふ父のこゑ」に、切迫した病状が伝わってくる。

掲出の句。母堂を見舞う作者、昏々と眠る母の病林の傍らで身じろぎもせず坐す作者。やがて消灯時間が来て、外に出ると、折から新樹の若葉の香りが作者を包む。「出づるやにほふ」は平穩な表現だが、作者にとつては此の上ないひたすらなる祈りの言葉である。

富士筑波嶺を跨ぐや虹の橋

赤岡 茂子

雄大な構想の句だ。名峰富士に対する筑波山は標高八七七メートル。古来「西の富士、東の筑波」と称された。

いま、その富士と筑波を跨ぐように虹が架かっているという。天文学的には無理な構想だろう。しかし俳句は創作である。作者は九十六歳。発想の若々しさは、七色の虹をも手中に収める。気宇壮大な作品である。